

## 編集後記

今月号は、原著6編(大学4編,がんセンター2編),症例報告15編(大学4編,市中病院11編),臨床経験3編(大学2編,市中病院1編)で,原著論文は大学に,症例報告は市中病院に多いという従来からの傾向と変わらず,原著論文が多くなったとはいええない。学位論文は優先的に取り上げられている。優秀な原著論文は国際委員会に推薦してその評価基準に参考にして頂いているが,なかなか巡り会える機会がない。

編集幹事3年の後,編集委員を担当して4年を経過した。この間,編集委員長は鍋谷先生,大原先生を経て現在の佐治先生となり,編集委員会は少しずつ変化してきている。大いに勉強させていただいている私自身の関わり方の変化もあろうが,担当理事,委員長や委員の先生方のお人柄により編集委員会の雰囲気も変化してきているのかもしれない。しかし,一貫して変わらないことは,本学会誌を最高の邦文誌として維持してゆきたいと願う担当理事や編集委員長の強力なリーダーシップと情熱とである。

現在,投稿論文は3人の編集委員が各々査読してから,毎月の編集委員会で論文の採否,修正点などを審査している。臓器別に偏ることなく等しく全ての分野を順に査読しているが,最先端の内容になると,分野によってはその論文の位置づけを正しく評価することは必ずしも容易ではない。その場合,私は著者の主張点の論旨や形式などに矛盾がないかを評価して,全体の編集委員会で審議して頂き各専門家の判断に委ねることにしている。

現在の査読体制を新たに臓器別編成(上部消化管,下部消化管,実質臓器)に分けて査読し,更に専門分野や特殊分野の査読は学会内外の専門家に依頼するなど,専門化の著しい消化器外科領域の論文を的確に評価して会誌の質的向上を計るよう,編集委員会の運営方針の変革が検討されている。更には,論文の査読評価を中心としていた編集委員会の位置づけを,編集作業以外の企画や編集方針などの基本的な政策についても議論する場とすることも検討されている。本学会誌が,様々な研究や経験などの発表の機会としてのみならず,会員各位の真摯で活発な意見交換の場としての機能も果たして行くべきであろうと考える。今後,本会誌が英文誌と collaboration を行うことにより,海外での評価も向上してくれば,来る21世紀には名実ともに「最高の邦文誌」を維持してゆくことが期待される。

(今泉俊秀)